
自称ゲーマーと凡キャラでFPSします。

池波創路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自称ゲーマーと凡キャラでFPSします。

【Nコード】

N7883Y

【作者名】

池波創路

【あらすじ】

『Fantastic War』DDD社が開発した次世代型ゲーム。ジャンルはFPS。

全世界で絶大な人気を誇り、社会現象を起こしている。現実世界の“人間”が、ゲーム内の“人間”を操作する。操作するプレイヤー（人間）、操作されるキャラクター（人間）の駆け引きがゲームの流れを左右する。

冴えない人生を送る向田宗佑は、このゲームにキャラクターとして参加することを決意する。自称ゲーマーの結城春人はFantas

t i c W a rのプレイヤーだが、大事にしていた操作キャラクタ
ーをゲームの戦場で失ってしまう。
2人が出会うことで、お互いの運命が大きく変わっていくことに…。

あらすじは仮です。今後、内容によって追記します。

プロローグ（前書き）

主人公のゲーム参加への動機が薄いので、設定を変更し、改稿しました。

プロローグ

今日もまた仕事がなかった…。

「くそっ」

啜えた煙草を足元に捨て、足で踏み消す。

スマートフォンを片手に不精髭を生やした男は駅へ向かい歩いていく。

むかいだそうすけ
向田宗佑、28歳。無職、多額の借金あり。

世間ではアラサーなんて言葉が定着しているが、俺から言わせれば耳障りな言葉だ。

元々は会社勤めのサラリーマンだったが、数ヶ月前にリストラされた。

その当時から借金があったため、返済能力のない俺は、多くの消費者金融から借り入れを行い、返済が困難な状態になった。いわゆる多重債務者というやつだ。

なかなか次の職は見つからず、日雇いのアルバイトをして、なんとかその日暮らしをしている状態だ。

人生終わってるよな。

このまま残りのつまらない人生を平凡に過ごし、死んでいく。

そう思っていた。

あのゲームと出会うまでは…。

「昨日のあれ見た？」

「ああファンウーだろ？ 見た見た」

「一人腕なくなってたよね」

「あれってやつばマジなの？」

「わかんねーやらせて話もあるらしいよ」

電車の吊り革に捕まり、『Fantastical War』と書かれた電車の中刷り広告に目をやる宗佑。筋肉質な男が銃を持ってポージングしている広告だ。持っている銃はおそらくM4カービンだ。コルト社が開発したアサルトカービンでアメリカ陸軍でも使用されている。無駄に知識はある。俺はミリタリーな映画が好きだ。

『Fantastical War』とは最近流行っているゲームである。いや、最早流行っているを通り越して、社会現象になりつつある。若者たちの間では「ファンウー」とか「ファンタ」、「非現戦争」なんて呼ばれてる。日本人は呼称を付けたり、略するのが本当に好きだ。

ファーストパーソン・シューティングゲーム

いわゆるFPSというジャンルで、一人称視点のプレイヤーが敵味方に別れて銃で撃ち合い、勝敗を競うゲームだ。俺も昔やったことがあるが、画面を観ているだけで酔ってしまい、何が面白いのかわからなかった。まだ、サバゲーの方が面白いと思う。まあサバゲーはやったことはないのだが…。

FPSなんてジャンルは特定の層の人間にしか好まれないジャンルなのだが、このゲームが爆発的にヒットしたのは、理由がある…。

ゲームの中で実際に操作するキャラクターがプレイヤーと同じ、現

実に存在する“人間”なのだ。

俺らの世代からすれば、ゲームといえばテレビゲームが主流だった。テレビゲームも年々進化を遂げ、インターネットの普及によってゲームもネットに繋げてプレイするのが当たり前になった。俺がゲームに興味を持っていたのはこのぐらいの技術のときで、今はさらに進化を遂げている。

詳しい技術は俺もうる覚えなのだが、ゲーム内の操作キャラクターは実際の“人間”であり、現実世界のプレイヤーはゲーム内の操作キャラクターと脳がリンクすることで、自分の分身のように操作することができるようになるらしい。

例えば、モニターの前でジャンプをするように命令をすれば、ゲーム内の操作キャラクターも同じようにジャンプをする。これは、脳科学の進歩により、“人間”の脳に固有の番号を与えたチップを埋め込み、別の人間からそのチップへ命令となる信号を直接脳に送ることが可能となったからである。

この技術はBLC(Brain Link Communication)と呼ばれる。数年前から仮想空間??現実には存在する場所だが、プレイヤーには非公開??で、別の“人間”を自分の分身として生活させ、仮想空間内でコミュニケーションをとることができる『DreamExp』がヒットしたことで近年爆発的に普及した。『DreamExp』は10年以上前に流行した、SNSソーシャル・サービスの中でつくる自分の分身、アバターのようなものだ。実際の“人間”を購入し、自分の好みの服を着せ、仮想空間で自分の分身のように操作するのだ。

あるものは、人気モデルを操作し、仮想空間の雑誌の表紙を飾る。

あるものは、金持ちを操作し、毎晩ギャンブルに溺れる。

あるものは、イケメンを操作し、毎晩違う女と一夜を共にする。

またあるものは、現実とは正反対の性別を操作し、違う人生を歩む。実際操作しているプレイヤー側は、モデルとはほど遠いデブスだったり、彼女いない歴[〃]年齢の童貞だったりするのだ。

現実世界でできなかったことができる夢の世界、今とは別の人生を歩めるといった声がユーザーから挙がり、『DreamExp』は大ヒットとなった。これにより、同開発会社であるDトリプルディーDD社から新たに登場したのが『Fantastic War』なのである。

また『Fantastic War』は、ネット上で毎回プレイの様子が配信され、プレイしていない人にも観るエンターテイメントとして絶大な人気を誇っている。ゲーム内では、毎回ランキングがつけられており、ランキング上位のゲームキャラクター、それを操作するプレイヤーはスター扱いされている。

こんなゲームが流行っているなんて世も末だな…。

宗佑は電車の入口付近の空いた座席にゆっくりと腰を下ろした。

プロローグ（後書き）

意見、感想があれば是非お願いします。

1 (前書き)

気になる部分を修正しました。

【12/19

改稿】

俺は電車の入り口付近にいる高校生の会話に耳を傾けた。

「お前は誰応援してんの？」

「俺？んーやっぱKEIケイかな」

「かつけーじゃん。2丁拳銃でさ」

あいつか…。確かにかつこいいが、女性ファンが多いあいつは嫌いだ。さつさとゲームオーバーになりやいいのに。俺はイケメンに嫉妬しているだけだ。

だが、あいつの使用しているベレッタM92は魅力的だ。プロットブアップ式ショートリコイル機構を持ち、スライドの上面を大きく切り取ったデザインは大変美しい…。テレビドラマや映画にも多く使用されているのは納得だ。

「俺は断然、HARUハルだな！」

「なんせあの胸！スタイル！顔も綺麗だし、ヤバくね？」

それは同意だ少年。激しい戦闘の度に、激しく揺れるあの胸！男なら誰もが応援するだろう。俺は毎回あの子の胸：いやいやあの子の活躍を観るのが楽しみなんだよ。

「でもさ、あのゲームに参加してることとは、やっぱ“こつち”の世界で色々あったダメ人間てことだろ？」

「まあ、キアラになるぐらいだからね。金のためでしょ」

「噂だと多額の借金を抱えてる人を見つけて、参加させてるらしいよ」

「怖いね。プレイヤーで操作して参加する分にはいいけどさ、キヤ

ラになつて死ぬのは嫌だよな」

「下手なプレイヤーだとキャラも可哀相だよな」

「ああならないために、必死で勉強して良い大学行こうとしてんだけどね」

「ちげーねー」

高校生達は、時折大きな声でゲラゲラ笑いながら、ファンウーの話をしていた。俺はなぜか自分が笑われているような気がした。ゲーム内で操作されているキャラクターは、金に困って参加した人達だ。

中には、自分の強さをひけらかしたい戦闘狂のようなやつもいるらしいが、少数派だ。

今の自分と同じような境遇の人達がゲームに参加しているため、毎回ネットでの放送を観ているうちに参加者に大きく共感していた。ゲームは毎ステージ勝ち抜くたびに報酬が得られる。勝ち抜いた数が増えるほど、金額が増えていくシステムだ。ただし、ある一定数まで勝ち抜かなければゲームから解放されることはない。当然、ゲームオーバーになれば操作されているキャラは死ぬことになる。

とても俺にはあんなことできるわけがない…。

電車のドアが開き、俺は駅のホームに降りた。真っ直ぐに家へ向かうつもりだったが、少し歩きたい気分だった。家の近くの商店街をぶらぶら歩き、小さな公園で足を止めた。

くしゃくしゃに潰れたソフトパックからふにゃふにゃの煙草を一本取り出し、口に啜えた。上着のポケットからライターを探す。が、見当たらない。苛立ちながら全身を探っていると、目の前にオイルライターの火をつけ、こちらに近づく男性が。オイルライターから出る火を啜えた煙草につけ、ふーっと煙を口から吐き出した。

「助かりました。ありがとうございます」
「いえいえ」

火をつけてくれた紳士なこの方は、すらつと背が高く、自分よりやや高い。ちなみに俺は175cm。年齢は40代ぐらいだろうか？顔の皺しわが少なく健康的な肌は、30代に見えなくもない。ピシッとスーツを着こなしている姿は俺より清潔感があり、好印象だ。

「私はかなりのヘビースモーカーでね。最近は煙草も値上がりして“こつち”の世界で喫う人は珍しくなったから、目に留まってね」
「確かに“こつち”では、肩身が狭いですよね」

ふと紳士に目をやると、煙草を薬指と小指に挟んで喫っていた。変わった喫い方だな。

俺は沈黙が気まずくなつたので、紳士に話しかけた。

「この辺りに住んでいるんですか？」
「いや、私は外回りだね。ちよつと休憩しようと思つて立ち寄つたんだ」

俺は紳士と、たわいのない会話のキャッチボールを繰り返した。

「君は普段は何をしているんだい？」

紳士は喫っていた煙草を携帯灰皿で消し、俺に尋ねてきた。

「お、俺は…」

俺は下を向いて、短くなつた煙草を指でいじり始めた。俺は人と話しているときに、自分に都合が悪くなると相手から目を逸らし、指

いじりを始める悪い癖があった。

「平日の昼間にラフな格好で公園にいる時点でなんとなくわかるよ」
紳士に凶星をつかれた俺は恥ずかしくなった。頬を触ると、顔が熱くなっているのがわかった。

「凶星かい？」

白い歯を見せて笑った紳士は、40代に見えた。

「からかわないでくださいよ」

俺は初対面でいきなり小馬鹿にされ、少し苛立った。短くなった煙草で、新たに啜えた煙草に火をつけだしたのがその証拠だ。

「すまん、すまん。仕事柄色んな人を見てきたからね。なんとなくわかるんだよ」

紳士はゴソゴソとスーツの上着のポケットから艶のあるレザーの名刺入れを取り出した。中から一枚名刺をつまみ、俺の目の前に差し出した。名刺のつまみ方が煙草と同じなのが気になった。俺は煙草を口に啜え、両手で名刺を受け取り、名刺に目を通す。

「えーっと……^{トリプルディー}DDD社……。ト、トリプルディー社ってあのDr eemExpとかFantastic Warの？」

驚いた俺は啜えていた煙草を地面に落としてしまった。紳士は俺が落とした煙草を屈んで拾い、携帯灰皿で消しながら話し始めた。

「私は^{トリプルディー}DDD社のスカウト部 部長 ^{まじまじはる}真島昴だ。まじまじじゃなくて、

ましまだぞ」

「はあ」

少し戸惑ったが、俺も簡単な自己紹介をした。

「私は主にファンウーのキャラの人員を確保するためにスカウト活動をしている。DreamExpはかなり前から動いているから、キャラのマーケットはかなり賑やかなんだけど、ファンウーはまだまだだね。ユーザーからもキャラが少ないって声が多いんだ。DreamExpは人権の問題でかなり揉めたけど、一応求人をお公に募集できるんだ。ファンウーは人権以上に人命がかかっているからね。こうしてスカウトって形を取らざるを得ないんだよ」

「で、俺をスカウトしようとしてるわけですか？ ファンウーのキヤラはゲームオーバーになったら、死んじゃうんですよ！」

「確かに。リスクはでかい。だが、見返りも大きいだろ？ 例えば、DreamExpで“あっち”の世界で雇われても、“こっち”の世界の年収のせいぜい倍ぐらいしか稼げない。そのうえ、行動の自由は操作するプレイヤーに奪われる。最近は敷居が低くなって、一般人で働く奴も増えた。そのせいもあってか、個人の年収は年々減少しているのが事実だ。ファンウーなら月収とか年収とか気にする必要はないな。そもそも報酬の桁が3つは違う。毎日撃ち合いをするわけじゃないから、普段は好きなことをしていてもいい。ゲーム内の衣食住にかかる費用は運営側が持つし、ゲーム内で使用する兵器はプレイヤーが費用を負担する。クリアすれば、ゲームから解放されて、ゲットした金で“こっち”の世界で優雅に暮らせる」

「人生逆転するには十分な待遇だろ？」

「…」

俺は震える手でポケットから煙草を取り出そうとしてやめた。真島は俺から名刺を取り上げ、名刺の裏側に連絡先を書いて再び俺に渡

してきた。

「すぐには決められないだろうし、気が向いたらここに連絡してよ」
真島は俺に軽く手を振り、公園を後にしようとするが、途中でピタッと立ち止まり、振り返った。

「言い忘れてたんだけど、今ランキングに出てるKEIやHARUをスカウトしたのも俺だから。君はそのスカウトのお眼鏡に叶ったんだぜ」

ニカッと笑った真島はやはり40代に見えた。

1 (後書き)

意見、感想があれば是非お願いします。

2 (前書き)

気になる部分を修正しました。【12/19改稿】

「5000でどう？」

俺の部屋の大型モニター　??壁一面周囲360度が情報端末のように様々な情報をリアルタイムで映し出すことが可能??　の1つのウインドウに映るぼっちゃりした少年は札束を机上いっぱいに広げて言った。

「俺はこのライフルもつけるぞ！」

先ほどの少年の横のウインドウに映っているもう一人の少年は、少年か?と首を傾げたくなるような老けた顔をしており、対戦車用ライフル『シモノフPTRS1941』をモニター越しに差し出した。

「純くん。KEIを譲ってよ」

2人の少年達の隣のウインドウには大人びた少女が、モニター越しでもわかる胸元を強調した服装を純と呼ばれた少年に見せびらかすように言った。

「だーめだめ。あいつは今の俺のお気にだよ?　いくら金積まれたって譲らないよ」

純と呼ばれた眼鏡の少年はソファに座り、4人が映るモニターを見ながら言った。

「…」

4人のやり取りをモニター越しに見ていた俺は、沈黙を貫いていた。彼等のやり取りがあまりにも馬鹿馬鹿しいと思っていたからだ。

俺の名前は結城晴人^{むすき はるひと}。16歳の高校生で、自分でいうのも何だがヘビーゲーマーだと自負している。今モニターを通して会話をしている4人は同じ学校のゲーム仲間だ。

ぼつちやりした少年は大門太志^{だいもんたいし}。父親が大手食品メーカーの経営者で『DreamExp』や『Fantastic War』内に食品を提供している。小さい頃から食品の試作品を食べ過ぎたせいで、今の体型になったと俺は思っている。当の本人は太っているという自覚はあまりなく、“デブ”や“豚”などのワードは彼の前では禁句だ。

老けた顔をしている少年が、古湊源^{こみなとげん}。父親は大手重火器メーカーの社長で、『Fantastic War』内の重火器も提供している。父親の影響のせいか、重火器のコレクションが趣味なようであるが、骨董品のような古い重火器を集める傾向にあるようだ。

胸元を強調した服を着ている少女が、西園寺未来^{さいおんじみく}。母親が大手アパレルメーカーの社長であり、DDD社の制服から『DreamExp』内の服のデザイン、『Fantastic War』の野戦服などを提供している。今説明した3人はクラスメイトであり、普段から仲が良い。特に未来とは幼馴染で家族ぐるみの付き合いだ。

因みに俺の父親はBLCの基礎理論を提唱した科学者で、DDD社お抱えの人気ゲームデザイナーでもある。俺がヘビーゲーマーになったのは父親の影響だ。昔から色々なジャンルのゲームが家にあつたので、俺は自然とゲームに熱中していた。中でも『Fantastic War』は、父が開発の中心にあり、試作段階からテスト

ーとして何度も遊ばせてもらったので、思い入れが強いゲームだ。

3人にファンウーのキャラクターを譲ってくれとせがまれている眼鏡男子が、二階堂純にかいどうじゅん。純の父親はDDD社の社長で、俺の父親が提唱した基礎理論を素に『DreamExp』や『Fantastic War』を考案した人だ。純は、俺達4人と同じ学年だが、クラスは別だ。俺の父親と純の父親が顔見知りなので、『Fantastic War』のゲーム仲間として交流がある。普段から俺に対して気に障る発言をする純を俺は友達とは認めていないので、仲間とは呼びたくないのだが。今日はチャットルームを作って5人でゲームについてたわいの無い会話をする会が開かれているところなのだ。

「じゃあ純くんこれならどう？」

俺達が映るモニター越しに、未来は着ている上着を脱ぎ、ブラを外して胸を手で隠した。モニター越しの俺と太志と源は、モニターにかぶりついてその様子を見ていたが、純だけは冷めた様子でソファに腰を下ろしていた。

「だめだよ。どんなことをされてもKEIは手放さないよ」

「やめるよみんな。恥ずかしくないのかよ。未来は服着ろ！ 太志は金しまえ！ 源はそんな骨董品持ち出すな！ 寄って集ってキラ譲ってくれなんてさ」

馬鹿馬鹿しくて黙っていた俺だったが、間違った道に向かっている友人を放ってはおけなかったのだ。

「晴人だってこの前BILLYが壊れちゃったじゃない？」

俺は^{あたが}恰も自分の父親の力だけでファンワーが完成したと思っている純に腹が立った。

「なんだよ急に。今日のチャットは終わりだ！ せいぜい、みんな僕に近づけるように頑張つてよ。じゃあねー」

どうやら純はモニターの接続を切ったようだ。他の3人も今日はお開きだと感じたようで、次々とモニターの接続を切っていった。俺の部屋のモニターにはさつきまで映っていたウインドウは全て消え、各国のニュース映像が流れている。俺はモニターに映し出された“F W R e c o r d”と書かれたウインドウを指でタッチし、真つ暗な自分の部屋でB I L L Yと最後にプレイした映像を眺めていた。

「B I L L Y…。ごめんな…」

「つたく、うるさい奴等だ。たいして腕もないくせにさ。だが、晴人がリタイアしたのはでかいな。あの大したことないキャラでベスト10目前まで順位を上げていたからな。ま、どっちにしても僕とK E Iの敵じゃないけどさ」

部屋のカーテンを開けた純は、スマートフォンでどこかに電話を始めた。

「もしー。まじま？」

「これはこれは純様。今日はどうされましたか？」

「最近のストアさー全然いいキャラいないんだけどさー。仕事してんの？」

「純様には以前私がスカウトしたKEIがあるじゃないですか。ランキングでも現在3位ですし、純様との相性も良いように見えるのですが…」

「まじま…。僕はね。1番じゃなきゃ嫌なんだよ」

「はあ」

「だからさ、有望そうな奴が入ったら僕に教えてよ。すぐ交渉に入るからさ」

「かしこまりました」

「わかってるね？ちゃんと仕事しないと“パパ”に言いつけるからね。じゃあよろしく」

純は一方向的に電話を切った。

「…」

「あのクソガキがあ！ こっちが下手に出てれば偉そうなことばっかいいやがって！ だいたいまじまじゃなくて、まじまだ！ 社長の息子だからって調子に乗りやがって」

真島は煙草を取り出し、火をつけようとしたが、“屋内全室禁煙”の張り紙が目に入り、舌打ちをして煙草を胸ポケットにしまった。

「真島さん。ちょっと書類でわからないところがあるんだけど」

俺は分厚い書類を片手に真島に歩み寄った。

「あ？ まじまじゃなくて、まじまだって言ってんだろが！ ポケ！」

「いや、あのっ、俺今、まじまさんって…」

「で、どこがわかんねーんだ？」

俺の発言は真島に見事にスルーされたようだ。

「これが。ダラダラ書いてあるけど、様は “あっち” でなんかあつても一切文句言っくなよつてこと。OK？」

俺は契約書と書かれた何枚にもなる紙に目を通していた。

「聞ってるか？」

公園で真島に出会ってから1週間が経っていた。この1週間で俺がしたことといえば、日雇いのアルバイトを2回しただけだった。家賃も今月で3ヶ月滞納。カードは大分前にストップさせられた。いよいよ追い詰められてきた俺は結局、名刺を片手にスマートフォンに手をかけていた。死ぬのは嫌だ。

でも、どんなに真面目に働いても、膨大に膨れ上がった借金は返済できそうにない。真島は俺が必ず来ると思っていたらしく、笑顔で俺を迎え入れてくれた。今思えば公園での出会いは、偶然を装ったスカウト活動だったに違いない。

手続きは思いのほかスムーズに進んだ。基本は書類を書いて、印を押すだけだ。

「真島さんさつき誰と電話してたんですか？」

「ああ、クソガ…いやいやお得意様だよ」

「まだ16歳の高校生だけだな。“ある会社”の社長の息子でな。ファンウーのプレイヤーだ。JUNって言えばわかるか」

「JUNってあのKEIを操作してるプレイヤーですよ？ボンボンがプレイしてたんですね。なんか意外だ」

「ファンウーのプレイヤーはたいがいボンボンだろ？ キャラは高

いし、兵器にその弾薬。金持ちじゃなきゃ、プレイできないと思うぞ」

「結局、世の中金なんですね…」

俺は書類を机において頂垂れた。

「とりあえず、書類はこんなとこだな。次は身体検査だ」

俺は真島にメデイカルルームと書かれた部屋に通された。そこには、絵に描いたような綺麗な女医が脚を組んで椅子に座っていた。

「はじめまして。新人さん。私はDトリプルデーDD社 メデイカル部 高木リサ。よろしくね」

リサは挨拶もそこそこに俺に説明を始めた。

「フアンウーのDデイションツフSHOPに君を並べるためには、色々調べなきゃならないの。健康状態、持病、身体能力、性格とか君の隅々までね。まあ調べることにしては、さっきの書類を読んで承諾して貰ってるはずだから、私の指示に従ってもらっわ」

俺の診察は、触診から始まり、身体の穴という穴に管を通され、リサの言うように、身体を隅々まで、診られた。

こんな綺麗な女医に、自分でも見たことのないようなところまで覗かれてしまった…。

かなり恥ずかしく、屈辱でもあったが、それほど不快な感じはしない。どうやら俺はMっ気がそれなりにあるようだ。

「次はズボン抜いで。パンツも下ろして、そのベッドに股を開いて座って。」

「こんなところまでですか？」

俺は恥ずかしがりながらも、顔はニヤけていることが自分でもわかった。

「今変なこと考えないでよ」

リサにそう言われ、俺は激しく取り乱した。診察の後は、筋力、反射神経、心肺機能などの身体能力の検査から、ペーパーテストのよくな性格検査まで行われた。全てが終わったときには、既に日が落ちていた。

「お疲れ様。これで“メディカルチェック”は終わりよ」

俺はリサから水の入ったペットボトルを受け取り、カラカラに渴いた喉を潤した。

「ありがとうございます」

シャワーを浴びて、髪が濡れたままの俺は疲れた声でお礼を言った。

「ようやく終わったか」

明らかに寝起きの顔をした真島は、禁煙パイポ風の無煙タバコを啜えながら、ゆっくり俺たちに近づいてきた。

「さて、こつからが本番だ。お前さんの脳あたしの中にチップを入れるぞ。こいつがないと何も始まらないからな」

「か、勘弁して下さいよ…今検査終わったばかりなんですよ？」

「これが終われば、今日は終わりだ。我慢しろ」

真島にそう言われた俺は、深くため息をついたが、仕方なく指示に従った。

リサから簡単な説明を受けたが、せいぜい歯の治療に詰め物を入れたことがあるぐらいの俺は、脳あたまに異物を入れるのは抵抗があった。

「ちょっと頭開いて、ちょっといじくるだけだからね」

リサは可愛く言っただつもりだったようだが、全然可愛くない！
麻酔を打たれた俺はスーッと意識が遠のいていった。

2 (後書き)

意見、感想があれば是非お願いします。

3 (前書き)

気になった部分を修正しました。

【12/19

改稿】

俺は、病院の病室のような部屋で目が覚めた。身体を起こすと、少し頭痛がすることに気づいた。

「起きたわね」

真っ白な長白衣を着たりサがベッドに近づき、横に置かれた椅子に座った。

「気分はどう？」

「少し頭痛がしますが、今のところ特に何も感じません」

「一応簡単に診察するわね」

俺はリサに簡単に触診された。

「特に問題はなさそうね」

部屋のドアが開き、真島が現れた。

「起きたか。これでいよいよDSHOPデーショップに並べる準備が整ってきたな」

「整ってきた……って。まだあるってことですか!？」

「ああ。お前にはこれから模擬戦をやってもらう」

「模擬戦？ 具体的にはどんなことをするんですか？」

俺はベッドから上半身を起こして、真島の説明に耳を傾けた。

「ファンウーの実戦と同じように銃で撃ち合いをしてもらうだけだ」

「撃ち合いつて。戦場に出る前に死んじゃうじゃないですか!」

「落ち着け。実弾は使用しない。ペイント弾で命中したかどうかを確認する。これからDSSHOPデーションョップに並べる商品を傷ものにはできないだろ」

「そついうことですか。なら安心だ」

「確かにペイント弾を使用するから、死ぬことはないし、ケガもない。だがな、甘っちょろい気持ちで参加するなよ。この模擬戦の結果によつてお前の取り引き価格が決定する。良いプレイヤーに選んでもらう為にも、良い結果を残した方がいい」

「わ、わかりました」

「じゃあ、準備するぞ。付いて来い」

俺は真島に案内され部屋を出て、長い廊下をひたすら真っ直ぐ進み、エレベーターの前で足を止めた。

「乗れ」

「はい」

真島はエレベーターのドアを閉めると、B8のスイッチを押した。エレベーターは静かに下り始めた。B8Fに到着し、エレベーターのドアが開くと、再び長い廊下があり、真島は真っ直ぐ進んでいった。

暫く歩くと、突き当たりに大きな扉が見えた。ただの扉というより、格納庫の扉のような頑丈な造りをしている。

真島は首から下げているネックストラップのIDカードを扉横の端末に翳かざした。数秒後、扉が上昇し、部屋の内部が露わになった。

「なんだこれ…」

俺の目の前には、沢山のスイッチや、配線が並べられた見たことも

ない多くの機材と、それを操作する大勢のオペレーターがいた。オペレーター達の目の前には、映画館のスクリーンのように大きなモニターがあり、銃で撃ち合いをしている人達の映像が流れている。奥に進むと、ガラス越しに下の階層が肉眼で見えるようになっており、チェスの盤面を上から見るように戦況を確認することができるようになってる。

「ここは、戦況管理部のブリッジだ。今下の階層のB9Fで行われているのが模擬戦だ。あそこで戦っているのもみんなお前と同じで、これからDSSHOPに並ぶ奴等だ」

「キャラが少ないと言ってますけど、全然そんな風には見えませんね」

「これからのゲーム運営のために、キャラのスカウトを強化したんだ。だからこれまでとは比べ物にならないぐらいキャラが増える予定だ」

「ライバルが増えるってことですね」

「そういうことになるな。じゃあ、これから模擬戦の説明を受けてもらう」

「アニー」

「はい。私、DDD社 Fantastical War 戦況管理部オペレーターのアニーバークルです。よろしくお願ひします」

アニーは、幼い顔立ちをしており、正直見た目は少女のように見えるため、年齢はわからない。DDD社支給の制服をキツチリ着こなしているが、胸は窮屈なようで胸元のボタンは一つ外しているようだ。実にけしからん胸をしている。俺はついつい、視線が胸元に向いてしまう。

「あ、あんまりジロジロ見ないで下さい」

アニーは胸元を見られるのが恥ずかしいようで、薄暗い部屋の中でも顔が真っ赤になっているのがわかった。

「ごめん、ごめん。あまりに立派な胸むねが目の前にあつたもんで」

俺はわざと視線をアニーの胸元に向け、ニヤけた顔で言った。

「せ、セクハラです！」

パンっという濁いた音が部屋に響いた。

「それでは説明を始めますね」

アニーはモニターに映し出された映像を差しながら、身振り手振りで模擬戦について説明している。最前列で説明を聴いている俺の右頬は真っ赤に腫れ上がっていた。

(まだジンジンする…)

説明を聴いている小さな部屋の中には、俺の他に15人の模擬戦参加者がいた。俺も含めて全部で16人。アニーのダラダラとした説明を要約すると、16人でデスマッチを行うというものだ。ファンウーは基本的にはチームに分かれて行うが、今回は操作をするプレイヤーがいなかったため、単独でどこまで戦闘を行えるかを評価するらしい。戦闘の結果から、戦況管理部のコンピュータで情報を整理し、最終的に階級が決まるらしい。この階級によってDSHOPデータショップの取り引き価格が決定する。階級は軍隊で使用されるものと同じで、一番下の階級は二等兵、一番上の階級は大元帥となる。これから行う模擬戦終了時点では、一番下の階級が二等兵、一番上の階級は中尉となる。従って、DSHOPデータショップに並ぶ時点で最も評価が高いキャラクタ

「は中尉となる。それ以降の階級は、実際に実戦での活躍によって決まる。」

「それでは説明は以上です。みなさんB9Fに移動して下さい」

(ともかく、今は模擬戦で活躍して中尉になるのが目標だ)

「みなさん全員いますかー？　これからあなた達には、野戦服とヘルメット、タクティカルベスト、武器とペイント弾を支給します。それぞれ、そちらにいる係りのものから受け取って下さい。武器については別に説明するので装備を身につけてお待ち下さい」

俺はDDD社の制服を着た係員から野戦服とヘルメット、タクティカルベストを受け取り、身に付けた。

「武器は今回はメインが3つとサブを用意しました。メインの1つ目は、アサルトライフル、2つ目はスナイパーライフル、3つ目はショットガン、サブにはハンドガンを用意しました。メイン武器は、3つの中から1つ選んで下さい。なお、今回はペイント弾を使用するため、手榴弾などの投擲物は使用しません。武器もあちらの係員から受け取って下さい」

近距離、中距離、遠距離で??近距離はショットガンのレミトンM870。ポンプアクション式のショットガンでは最早定番で、各国の軍隊や警察で使用されている。最も威力を発揮できるのはだいたい、50m以内。中距離はアサルトライフルのM16A4。M16A2の改良型モデルで、ピカティニーレールが取り付けられているから光学スコープやレーザーサイトなど、付属品が取り付け可能だ。今回は何も取り付けられていないようだ。遠距離はスナイパーライフルのPSG1。ドイツ製のセミオートマティックライフルで、最

大射程は約700メートル。セミオートマチックでありながら、高い命中精度を実現させた狙撃銃だ。??それぞれの射程別に武器が用意されているのか。

サブのハンドガンは、H & amp; K USP。ドイツ製の自動拳銃だ。ドイツ軍の正式拳銃に採用されており、扱いやすい。

(どれも捨てがたい…。持てるなら全部持って行きたい…。ああ…
悩ましい)

俺はファミレスでも中々メニューを決められない優柔不断なところがあると自覚している。このような重要な選択肢が求められる場面でスパッと決められるはずがないのだ。

「アニーさん！ ど、どの武器が良いと思いますか？あなたが決めた武器なら死んでも本望だ！」

「は、はいっ!？」

(何を口走ってるんだ俺は。痛い痛すぎる…)

「そ、そうですね。一番バランスが良いのはアサルトライフルじゃないでしょうか？ スナイパーライフルだと、接近戦には弱いですが、初めてのステージで狙撃ポイントを見つけるのは難しいと思います。ショットガンは接近戦に特化しているので、敵との距離を詰めるには十分な威力が発揮されません。屋内など、かなり狭いステージでは有効だと思います。今回のステージは、ファンウーの広さ的には真ん中くらいの大きさで、建物も幾つかあります。屋外、屋内どちらもバランスが良いのはアサルトライフルかと」

「じゃ、じゃあアサルトライフルにします！」

俺は係りのものからアサルトライフル、ハンドガンを受け取った。

わかっていたことだが、ライフルは想像以上に重い。戦争映画などで楽々と扱っているように見えるが、実際はかなり扱いは難しいだろう。

他の参加メンバー達も各々自分の好みの武器を受け取ったようだ。アニーの俺へのアドバイスがあっただけか、アサルトライフルを持っているものが1人、スナイパーライフルが2人、ショットガンが2人と偏った結果となった。

「みなさん、武器は行き渡りましたか？ まだという方は拳手して下さい。」

「……」
「大丈夫なようなので、いよいよ模擬戦を始めたいと思います。みなさんの後ろにある転送ポッドの前にそれぞれ立ってください」

俺達の後ろには、卵型をしたカプセルのようなものが横一直線に綺麗に並んでいた。それぞれの転送ポッドには、番号が降られており、俺は何かの争奪戦のように一人だけ猛ダッシュで7の数字の転送ポッドの前に立った。選んだ理由は単純にラッキーセブンの7だからだ。

「転送ポッドは、あなた達をステージまで飛ばします。当然公平になるように、どのポッドを選んでも、ランダムでバラバラな初期の配置になりますので御安心下さい」

説明を聞いた俺は顔を赤面させた。

(俺だけ余裕がないみたいで恥ずかしい……)

「それでは、ポッドの中に入ってください」

俺達は、恐る恐る段差を上がり、転送ポッドの中に入った。

「全員入ったのを確認しました。それではみなさん、転送された先は戦場です。お気を付けて」

アニーがそう告げ、B8Fの戦況管理部に合図を送ると、暫くして俺達が入った転送ポッドが眩い光に包まれた。俺達は転送ポッドの中で武器を構え、転送に備えた。

光が消え去ると、先ほどまで転送ポッドの中にいた宗佑達の姿は跡形も無く消えていた。

3 (後書き)

意見、感想があれば是非お願いします。

俺は真っ白な光の中を、まるで無重力空間のようにふわふわ浮遊していることだけは認識できた。暫くして、俺の周りを包んでいた光は強烈な眩しい光を発しながら、スーツと晴れていき、足が地面に着くのがわかった。どうやら模擬戦を行うステージに着いたようだ。

先ほどまで眩い光に包まれていた俺は、西陽を浴びたように目を細めていたが、ゆっくりと目を見開いて周りの景色を確認した。

「これが、ファンウーの戦場……」

俺の目の前にはあまり舗装が行き届いていない、砂地の道が広がっていた。空は雲一つない快晴で、陽射しが強い。少し遠くに目をやると、白い壁をした建物が幾つか見えた。俺はニュースでこの風景を見たことがあるような気がした。中東に雰囲気似ているからだろうか。暫くキョロキョロ辺りを見回していると、遠くに見えた建物の方から、渴いた銃声は何発も聞こえてきた。連発音から察するに、アサルトライフルの銃声だろう。銃声は、時折止み、暫くしてまた鳴り響く。

(もう誰かが撃ち合ってるんだ……)

俺は銃声を聞いて、肩にかけていたメイン武器M16A4アサルトライフルを手に取り、構えた。そのまま自分の目の前の視界180度を確認後、後ろを振り返り、後方も確認した。後方は、砂地が遠くまで続いているだけで、建物は確認できない。敵が近くにいないことを確認した俺は、身を隠せる遮蔽物を探すことにした。今敵に遭遇したら、棒立ちで応戦してあつという間にやられてしまう。俺

は何度も見た戦争映画に出てくる、兵士達の一拳手一投足を思い出し、身体を低くして素早く移動を始めた。暫く進むと白い石造りの民家が見えてきたので、付近を警戒しながら、民家の前に着いた。民家の壁に背を預け、辺りを見渡した。何軒も家が先ほど通ってきた道を挟んで並んでいた。どうやら小さな街のようで、先ほどの場所から見えていたのは、この街のようだ。

「さて、どうするか」

俺は民家の木の扉を開け、中に入った。民家は石造りのせいか中は冷んやりしており、ひと気がないので余計にそう感じた。リビングルームと思われる部屋には、大きな四角いテーブルとソファが置かれているが、机には埃が溜まり、ソファには所々穴があいていた。窓にはヒビが入っており、軽く殴ったらすぐに割れてしまいそうだ。俺はこの白い民家の中でしたらしく身を隠していた。外からは絶えず銃声が響いている。

「このまま、こうしていても埒が明かない。なんとかしないと」

俺はこのステージに転送されてから気になることがあった。自分の視界の右上に時間を示すタイマー表示が出ているのだ。現在は26分24秒から刻々と時間が減っている。視界に時間が表示されているのは、戦況管理部が必要な情報を脳あたまに直接送り込んでいるからだ。俺は30分ぐらい前のアニーの退屈な講義を必死に思い出していた。

（たしか、ファンウーは時間制限があるってアニーさんが言ったな）

今回の模擬戦の制限時間は30分。30分で、何人を戦闘不能にできたかで評価が決まる。評価の指標は敵を倒した数が大半を占める

が、その他にも戦況管理部が各キャラクターの戦闘を記録したのも、指標の一つになるらしい。

(今俺がこの場に隠れていることも、ビビッてなかなか外に飛び出せない姿も管理部のオペレーターには丸見えなわけだ。腹を決めるか…アニーさん見ていてください！俺の勇姿を！)

俺はアサルトライフルを両手で構え、ゆっくり民家の扉を開けた。その瞬間、近くから銃声は何発も響いた。

「うお！」

とっさに民家の中に戻った俺は入口付近の壁にもたれ掛かり、外の様子を伺った。民家のドアには、2発のペイント弾が当たったようで、べつとりと真っ赤な塗料が付着していた。

「くそ！ どこからだ!？」

俺は街の中央を通る道の向こう側の高い鉄塔に人影が見えるのを確認した。

「あんな遠くから!」

俺は先ほどの銃声と、初弾から2発目までの時間差があったことからスナイパーライフルで狙撃されたと推察した。PSG-1の最大射程は約700メートル、俺のいる民家から鉄塔まで目測でだいたい200メートル弱と考えると、鉄塔にいるスナイパーはスコープ越しに俺を楽々視界に捉えているわけだ。

(よりによって、2人しかいないスナイパーの1人が最初の相手と

は…ツイてない)

俺は今の状況を打開できる策を必死に考えた。

(ともかく距離を詰めないと、奴を狙おうとしたときに先に俺が撃たれる。)

俺は再び転送前のアニーの武器の説明を思い出していた。

(確か、P S G - 1の装弾数は5発って言ったな)

アニーが実際にライフルから弾を取り出して説明していたので間違いないだろう。

(まだ模擬戦が始まって6分しか経っていない。ということとは、奴も俺が最初に遭遇したプレイヤーの可能性が高い。リロードはしていないとすれば、奴のライフルには残り3発の弾が残っているはずだ。3発の銃弾を掻い潜り、奴に近づいてやる)

俺は覚悟を決め、民家のドアから飛び出す。その際に、キッチンから拝借した大量の小麦粉を民家のドア付近にばら撒いた。大量の小麦粉は空气中に舞い上がり、俺の周囲を一瞬だけ白く染めた。ドアから飛び出す俺を狙っていたスナイパーはライフルの引鉄を引いたが、銃弾は俺に擦りもせず、地面に着弾して真っ赤な塗料をブチまけた。

(まず1発クリア!)

初弾をかわした俺はそのまま、猛ダッシュで街の中央を跨ぐ砂地の道まで飛び出し、反対側の民家の密集地を目指した。が、2発目の

銃弾が俺の右肩に直撃した。俺の右肩が塗料で真っ赤になる。まるで本当に負傷して大量の血が流れているようだ。ペイント弾のため、痛みのない俺はそのまま立ち止まらず、一気に反対側の民家に辿り着いた。俺は民家の壁を遮蔽物にし、鉄塔の人影を見た。ここから鉄塔までは50メートルぐらいだろうか、スナイパーはまだ鉄塔に居るのが確認できた。

（スコープを覗いているが、俺の方を向いてすぐに狙撃してこないということは、奴は俺のことを見失ったな。チャンス！）

俺は直様、民家の裏の細い路地に入り、鉄塔の真西側の民家に身を潜めた。ここからなら、アサルトライフルでも十分に狙いがつけられるはずだ。俺は狙いを鉄塔のスナイパーの頭部に定め、引鉄を引いた。連射された幾つもの弾丸はスナイパーのヘルメットを掠め、鉄塔の柱に着弾して真っ赤な塗料が柱をつたった。

「くそっ！ 外した！」

スナイパーは直ぐに俺の場所を特定し、ライフルの引鉄を引いた。俺はすぐに近くのゴミ収集箱に身を隠したので、ギリギリ銃弾をかわずことができた。スナイパーはもう一度射撃態勢に入り、引鉄を引くが銃声は聞こえてこない。弾切れだと気付いたスナイパーは急いでリロードを始めていた。

「これ待ってたんだ！」

俺は鉄塔の真北まで進み、スナイパーの背後に回り込んだ。

(今度は外さない)

俺はアサルトライフルの引鉄を引いた。
銃弾はスナイパーの顔面に命中した。スナイパーの顔は塗料で真っ赤に染まった。

「わぶっ」

俺の銃弾が直撃したスナイパーは、塗料が口に入ったようで、酷く咳き込んでいた。

俺はスナイパーに近付こうとしたが、スナイパーは眩い白い光に包まれ、一瞬で姿を消した。頭部に直撃したので、死亡したと判断されたようだ。俺たちの身につけている装備にはセンサーが取り付けられており、どこに銃弾が命中したかも戦況管理部が把握できるようになっていいる。俺の先ほどの右肩の銃弾は致命傷にはなっていないと判断されたようで、戦闘の継続が可能となったようだ。

(なんとか、1人倒せた…)

動きっぱなしだった俺は息があがっていて、肩で息をしていた。

(とりあえず、どこかに身を隠さない)

俺は鉄塔付近の広場を離れようとしたが、後頭部に何かが当たった感触が…。すると、目の前が眩い白い光に包まれた。

「えっ。まさか…」

俺は後ろを振り返ると、アサルトライフルを構えた男がこちらを見ていた。そのまま、俺は眩い白い光によって、一瞬でこの場から消

え去つた。

4 (後書き)

意見、感想があれば是非お願いいたします。

宗佑はステージに転送されたときと同じように眩い白い光の中を浮遊していた。どうやら、誰かにやられたようだ。後頭部に手を触れると、手の平にべっとり赤い塗料が付いた。不快に感じた宗佑は、野戦服のズボンに手の平をゴシゴシとなすりつけて汚れを落とした。暫くして、見覚えのある場所に戻ってきた。

「No.7 帰還しました」

DDD社の制服を着た係員が2人、宗佑の転送ポッドに近づく。何やらヘッドセットのようなものを付けており、上階のオペレーターに帰還の報告を行っているようだ。転送カプセルに戻ってきた宗佑は、視界の右上に表示されていたタイマーが消えていることに気づいた。

（終わっちゃったな。結局倒せたのは1人だけか。散々な結果だな）

B9Fの転送ポッドのある部屋には、既に模擬戦を終えた何人かの参加者がいるようだ。血を連想させる、真っ赤な塗料が体中に付着した姿は、戦争映画で観た野戦病院のシーンを思い出させる。疲弊して壁に寄り掛かって腰を下ろし、俯いている人が目に付く。慣れない環境と、戦いの緊張感からか、宗佑はひどく疲れていた。このままベッドに倒れ込み、明日の朝までぐっすり眠れたら幸せに違いない。壁に寄り掛かって、ブーツと床の一点を見つめていた宗佑にアニーが声を掛けた。

「宗佑さん、お疲れ様です。初めてのファンウーの世界はどうでしたか？」

「何とも言えません。戦い方も全然ダメでしたし」

「今回は模擬戦ですから、うまく出来なくて当然です。この後、実際にプレイヤーの方と戦場に出て色々勉強すればいいじゃないですか」

さっきまで落ち込んでいた宗佑に、アニーは励ましの言葉を掛けた。

「そうですね。元気出てきました！ありがとうございますアニーさん」

笑顔で頷いたアニーに宗佑も笑顔で応えた。

アニーの後ろに控える係員が、2人のやり取りを遮るように近付く。

「向田宗佑様。武器の返却と着替え、シャワーを済ませたら明日の朝までは自由時間になりますので」

「へいへい。わかりましたよ」

アニーとの至福の時間を邪魔された宗佑は仏頂面で、係員の指示に従った。

アニーに別れを告げ、諸々の作業を淡々と行った宗佑は、自分と与えられた個室へ移動した。ベッドに勢いよく倒れ込んだ宗佑は俯せのまま眠ってしまった。

「晴人！ おはよ！」

後ろから晴人の背中をポンッと叩いた未来は相変わらず露出度の高い服を着ている。

「おはよ。未来、ちょっと見え過ぎじゃないか？」

「え、そうかな？」

どうしても未来の露出された肢体に目がいつてしまうのだ。

「ていうか晴人学校来るの久々じゃない？ たかがゲームで引きずりすぎ」

「うるせーよ。俺はな、お前が思ってるより繊細なんだよ」

「何恋する乙女みたいなこと言ってるのよ」

校舎前の道を通り、晴人と美来は自分達の教室へと向かった。

「お。3日ぶりの登場じゃん晴人」

「ひへやひぶり（ひさしぶり）」

教室には、源と太志げん たいしが窓際の晴人の席の周りで晴人達を待っていた。源は学校にまで、コレクションしている武器を持ってきていた。太志は相変わらず、何か食べている。

（今日は焼きそばパンか）

「おう。ひさしぶり。ていうか、学校にまで銃持ってくるなよ。リボルバーの拳銃か？」

「コルト・シングルアクション・アーミーだ！ 知らないのか!？」

「いや、大概の人が知らないと思うぞ!？」

自分の席についた晴人は、鞆を置いて椅子に座った。

「で、来週のクラン戦はどうすんだよ？」

源はコルトSAAのシリンダーを回転させて、ふざけながら、晴人に聞いた。当然、弾丸は装填されていない。

「どうするったって、キャラがないんだ。不参加だよ」

鞆からゲームの雑誌を取り出した晴人は、雑誌を眺めながら答えた。鞆の中には、教科書の類、学生の自分である勉強に関するものは一切ない。携帯ゲーム機に、ゲーム雑誌、攻略本。ここまで、はつきりと勉強よりゲームに情熱を注いでいるのは寧ろ清々しい位であると以前担任の教師に言われたことがある。

「来週までに探せばいいだろ？」

コルトSAAの銃口を晴人に向けて源は言った。いつものおふざけなので、華麗にスルーしておこう。

「探すとか簡単に言ってるけどな、俺とBillieは最高のコンビだったんだ。そんな簡単に代わりのキャラなんて見つからないよ」

「まあまあ、とりあえず駄目元でさ、DSHOP見てみようよ」

未来に促されて、晴人は渋々鞆の中からノートPCを取り出し、電源を入れた。DSHOPのサイトを開いた晴人は、『Fantastic War』のページへ進んだ。未来と源と太志は、晴人の背後からPCの画面を覗き込んだ。

「お！ てか武器のコーナー大量入荷！」

「ひゃべものは（食べ物は？）」

先ほどまで焼きそばパンを食べていた太志は、今度はコロッケパンを食べている。

（朝からよく食うな…）

「何このデザイン可愛い！ オーダーメイドの野戦服だって！ ママいい仕事してるわ！ 晴人そこ見せてよ！」
「お前ら…」

3人の意見を当然のように無視した晴人は、キャラクターのページを開いた。

「えーっと。とりあえず新しく入荷した奴を検索して…」
「おー！ かなり増えてるじゃん！」

背後から画面を除いていた源は、晴人の肩に手を置き、画面に顔を近付けた。

「どれどれ…。おー凄いじゃん。晴人、ランクの高い順にソートかけてよ」

未来にそう言われた晴人は、検索条件のコンボボックスを選択し、ランクが高い順にキャラクターの表示を並べ替えた。

「んー？ これだけ入荷して、中尉が一人だけ？ しけてんなー」
「本当だ。少尉もほとんどいないし、軍曹あたりの中途半端なのが
多いわね」

気づけば、未来まで画面に顔を近付けて、食い入るようにキャラクターを見ていた。

（ちょっと胸が当たってるんだが…。このまま黙っておこう）

「中尉のやつは…SOSUKEだってよ」
「ひよわそつ（弱そつ）」

どこから出したのか、太志は30センチくらいある長いチョコバーをかじりながら言った。

「模擬戦の結果見てよ！ 1人しか倒してないわよ」

「なんでこんな奴が中尉なんだ？」

「たしかに…」

「でも中尉になるってことは、結果以上に模擬戦の動きは良かったんじゃないのかな？」

「そうかもしれないな。とりあえずこいつ買ってさ、来週はこいつで参加してみるよ。お前がいないとチーム戦苦しいんだよ。頼むよ」

珍しく源が頭を下げてお願いしてきたので、晴人はどうにも断りにくくなってしまった。

「わかったよ。とりあえず、このキャラで来週は参加するよ。Biely以上のキャラになるとは思えないけどな…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7883y/>

自称ゲーマーと凡キャラでFPSします。

2011年12月29日09時48分発行